

禅

33号(通卷213号)



落花(立田英山写真集『我ここに今かく在りぬ』より)
(注)落花浮く清水を汲みて茶を点つる

「生きること」 と「死ぬこと」

井本 光蓮

「生と死」の問題は本誌でも繰り返し論じられ、すでに説き尽くされた感があるが、これは極めて宗教的なテーマであるので、もう一度取り上げてみたい。

(1) 不条理な「死」

先の太平洋戦争の末期、僕は中学5年生で17歳だった。4年生から軍需工場へ動員されたが、敗色日々に濃く、当時は18歳で赤紙（召集令状）が来て、20歳までに本土決戦で死ぬという図式が出来ていた。一体どうしたら一人前に死ぬのか？ そんな事を毎日漠然と考えていたが、僕には、「死」そのものよりも自分が死んだらどうなるのか？

ただ、この世から煙のように消えてしまうだけなのか？ この事がどうしても呑み込めなかった。どうせ死なねばならぬ者が何故生まれて来たのか？ 生まれたこと自体が間違いだったのか？ これは絶対矛盾ではないか。この不条理は、とても僕には超えられそうもなく、死を眼前にして、死んでも死に切れぬ思いだった。

戦争が終わって、僕は生きのびたが、この難問は消えるどころか深まる一方で、これが何時しか僕を「禅」に導いてくれた。

(2) 消えた死神

僕を神戸幸大寺の磨甑庵白田劫石老師の撮心会（注1）に誘ってくれた恩人は、近森潤 風居士（後の法爾庵老師）と明神威徳居士（後の南冥軒）だった。4撮心目によろやく入門が許されて参禅（注2）

が始まった。死神に取り付かれてから、すでに20年が空しく過ぎて、この門に辿り着くのが余りにも遅かったことが悔やまれた。

だが、ある夜更けに、いきなり天地がでんぐり返って生と死がグッと逆転した。一体何事が起こったのか、何故そうなったのか、当の僕にもさっぱり説明できないが、これでやっと死ぬるぞと思ったその日から、死神はかき消すように退散し、僕は安んじて生きていけるようになった。その時僕が思ったことは、このままで髪の毛一筋も足らぬものはなかったのに、丸ごとこのまま救われていたのに、今の今までどうしてそれに気づかなかったのかと、そのことが不思議でならなかった。

僕が超克不能の不条理と認めていたのは、己の無始よりの業識障ごっしきしょう（注3）に過ぎなかったのだ。あれから40年、こうして生きて来られた磨瓢庵老師の御鴻恩を憶うたびに、今も泣けて来る。

（3）生死一如しょうじ（注4）

釈尊は「人の命は呼吸の間に在り。」と喝破されたが、印度に古くから伝えられた「数息観」しゅうそくくわん（注5）という観法に打ち込んでいくと、一呼吸の間に生と死が共存しているのを実感する。僕は一呼吸ごとに、今、ここで、宇宙の命を生死している。まさに一期一会である。その時その場限りの命の姿がある。今が僕の生きる時であり、ここが僕の死ぬ場であって、その外に僕の生死はない。生の時は渾身の生を生き切り、死の時は渾身の死を死に切る。しかも刻々に生死している根源的な命そのものは、些いささかも生死にかかわらず、生死のままで生死を超えている。例えば、物は光と影によってその姿を現すが、存在する物自体は光でも影でもない。いわば、生死は命の衣裳いしやうに過ぎないのだ。

（4）生きながらの「死」

無難禪師の歌に、生きながら死人しびととなりてなり果てて思いのままにするわざぞよき という怖ろしい歌がある。

蒲団上で（坐禅しているとき）、また日常の上で、吾我ごが（注6）を

殺し尽くすこと、これこそが禅者の「死」であり、死に果ててから思う存分に自利利他のために働く、これこそが禅者の「生」であろう。

吾我を空ずることを、生きながら死ぬといっているこの歌の境地は怖ろしいが、吾我ほどしぶといものはない。

この頃こんなことを思う。僕が寝ている間も僕に呼吸させているのは一体誰か？ そしてまたある日、僕の呼吸を止めるのは誰か？ それが僕でないことだけは確かだ。僕は彼の名前を知らないが、生まれてこの方、この何者か（いわば宇宙的生命）によって生かされているらしい。僕の命は彼のものであって僕のものではない。どうしてこれを私物化することなど許されようか。こう言い聞かせて、ほんの少し吾我を離れられたかと思う。ついでに、道元禅師はこういわれた。【只、わが身をも心をも放ち忘れて、仏の家に投げ入れて、仏の方より行われて、これに随いもてゆく時、力をも入れず心をも費やさずして、生死をはなれ仏となる。】と。これもまた、無難禅師と同じ心であろう。

(5) 生死即涅槃 (注 7)

「山川草木悉皆成 仏」が釈尊の悟りだが、辺りを見渡せば、僕らは生まれながらに、大地や大気や太陽の熱や光にはぐくまれ、生かされている。逆にいえば僕らの一人一人、森羅万象のことがとくが、宇宙生命の現れでないものはない。そして目をこらせば、この森羅万象が生死しつづ流転する姿そのままだが、不生不滅の宇宙生命の流露する姿そのものではないか。

僕らの人生は、宇宙生命の悠久からすればただ一瞬にすぎないが、僕らの生死もまた、宇宙生命の輝きなのだ。

(6) 満ち足りた「死」

僕はすでに83歳、現実身に迫り来る「死」についても時折り考える。

僕の郷里土佐では、人が死ぬことを「みてる」という。この語源は「満てる」または「満ちる」であろう。この方言は、「死」を、命の

喪失ではなく、逆に充足、成就じょうじゆと捉えていることが素晴らしい。

人生は、その終焉しゆうえんに向かって次第に満ちゆくものであり、最後は命余って溢れ出す。そこを土佐では「満てた」という。まことに「生也全機現、死也全機現」(注8)という外ない。こうなると、生きることは楽しく、死にゆくこともまた風流ではないか。

編集部注

- (注1) 撰心会：撰心は、心を治めて散らさないの意。一定の期間(通常1週間)正脈の師家(禅の法脈を受け継いだ指導者)の指導の下に本格の禅の修行が行われる。
- (注2) 参禅：禅の指導者である師家からいただいた公案(人間として誰にも共通な人生の根本問題)を坐禅をして工夫くふうし、その見解けんげを師家に呈して深淺邪正を判別してもらう修行をいう。
- (注3) 無始よりの：遠い昔からある。しづとい。業識障：迷いの根源である吾我に執着して、ものごとの真実の姿を見ることができないことをいう。
- (注4) 生死一如：生・死は一つの同じものではないが、二つの別のものでもない。区別されていても、本質的には一つの意。
- (注5) 数息観：坐禅を組んで自分の自然の呼吸を数えながら三昧さんまい(息を数えることに専念する。)に入っていく修行。ものごとに正しくなりきる力を養う。
- (注6) 吾我：小さな我。虚妄の自己。「おれが、おれが」という我見。
- (注7) 生死即涅槃：生滅流転の世界を離れて不生不滅の世界はない。この現実の世界を離れて、極楽浄土(大調和の世界)というものもないということ。
- (注8) 全機現：全機現前の意。ひとの全体の働きが目前に現れ出ること。

著者プロフィール



井本光蓮こうれん(本名/淳作)

昭和3年、高知県生まれ。昭和39年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅師家分上。庵号/竜隠庵。